出会い　ふれあい　助け合い

KSKP サロン・あべの NO.54

一九九〇年十二月二日発行（毎日発行）KSKP通巻一五六三号一九八四年八月二〇日第三種郵便認可
発行人＝関西障害者定期刊行物協会　大阪市東成区中本一－三－六　ベルビュウ森の宮二〇七号

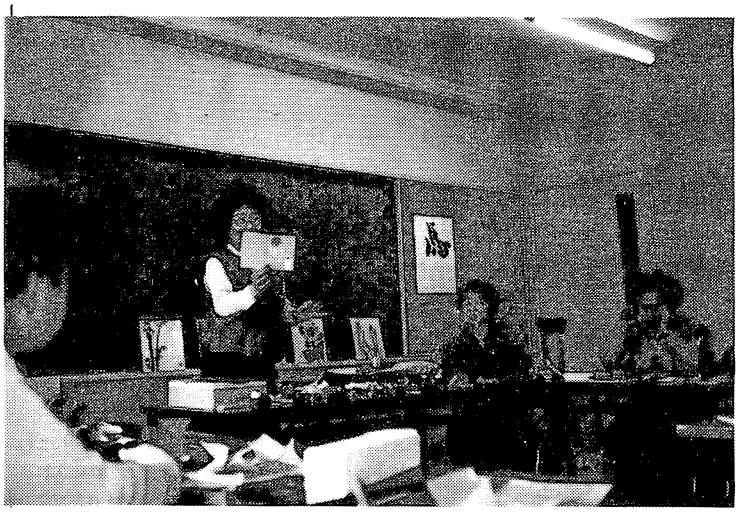
十一月の出会い

「たのしい　おりがみ」

サロン開催にうってつけの暖かな晴天になった平成二年十一月十七日（土）午後一時～四時、育徳コミュニティーセンター研修室に於て、阿倍野区ボランティア連絡協議会の今村明子さん（おりがみグループ代表）に「たのしい　おりがみ」を教えていただいた。

今村さんは、個人的に趣味としての「おりがみ」を楽しみながら色々と勉強されてこられた。これをボランティアの活動として始められて早、十二年。日本おりがみ協会の講師でもある。

「おりがみ」のボランティアグループとしてグループ員の方々と、あべのカーニバル会場や長居の市立身体障害者スポーツセンターで開催されるふれあい交流会等のイベントに参加されて、おりがみの楽しさ、懐かしさを会場に来られる方々に教えておられる。「おりがみコーナー」のお客さんは、子供さんから足が止まり、それに引きこまれるように付き添っている両親や、おじいちゃん・おばあちゃん方からも、手が出て家族ともども楽しまれる。その睦まじい光景を目の前にして、日本古来からある「おりがみ」の魅力をあらためて認識し、多くの方々と接し共に作る喜びを味わって



いる。

又、定期的に老人福祉センターでも「おりがみ」教室を開き、おとしよりの方々にその季節に合ったおりがみを教えて喜ばれている。毎回、参加者が増えて活動の励みにもなっている。

一枚の平面の紙を直線で折っていくだけで、様々な立体感ある形が生れてくる。このような手工芸は、日本だけのもので、世界に誇れる文化といえる。これからの国際社会を考えてみると、このように簡単に紙一枚で作れるものを一つ持っていると外国へ行った時や外国の人と会った時、コミュニケーションがスムーズにいき、国際交流にも役立つことがある。「おりがみ」という言葉は、国際語にもなっている。

「つる」や「やっこさん」は、複雑な折りかたになっているが、これが作れる人なら今日の「おりがみ」は簡単でやさしいものばかりなので、皆さんに覚えて帰っていただける。と、話をされ季節を先取りしたクリスマス用の「おりがみ」を教えていただいた。

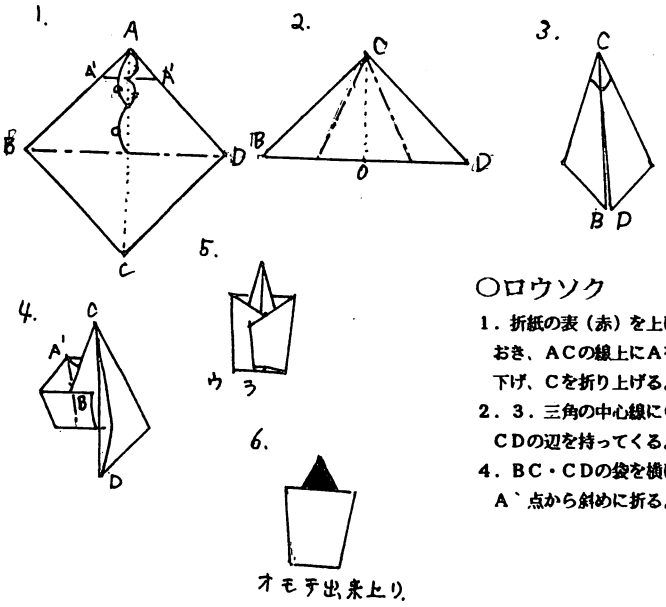
クリスマスツリーにつるす飾りが二種類と、二枚の紙を合わせてつくる古典的な菊皿。そして、ロウソク・ひいらぎの葉・星を作り、色画用紙に自分の好みにそれらを張り付けて作るクリスマスカード。アンコールでサンタのブーツも時間を超えて教わった。皆さん折りあげて、和やかな笑顔がひろがる。

参考作品として今村さんが折られた花やブーツ、下駄、小箱等、それに色紙に張られた四季の絵を見せていただいた。

指導のお手伝いに「おりがみグループ」より井上・筧・佐本さんが参加くださった。

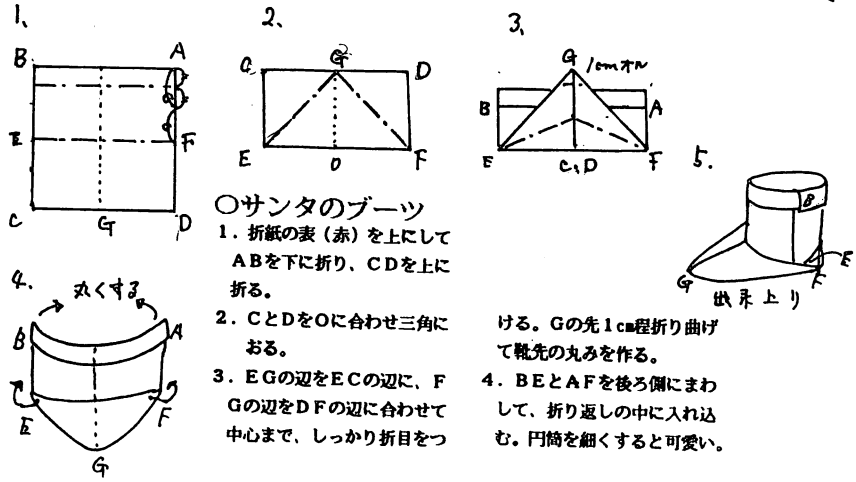
参加者二五名、司会は冨田さん。

＊おりがみの折りかた



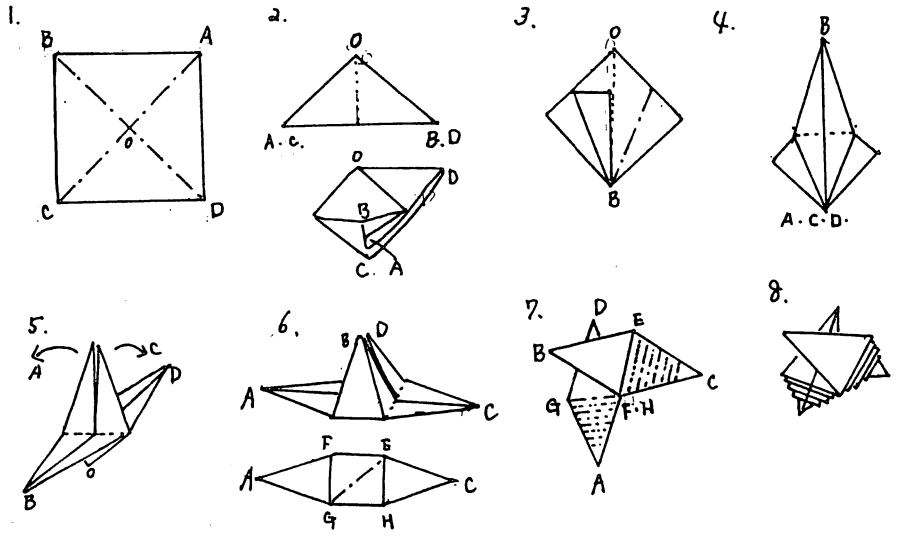
○ロウソク

1．折紙の表（赤）を上にしておき、ACの線上にAを折り下げ、Cを折り上げる。
2．3．三角の中心線にCB・CDの辺を持ってくる。
4．BC・CDの袋を横に開く。A`点から斜めに折る。



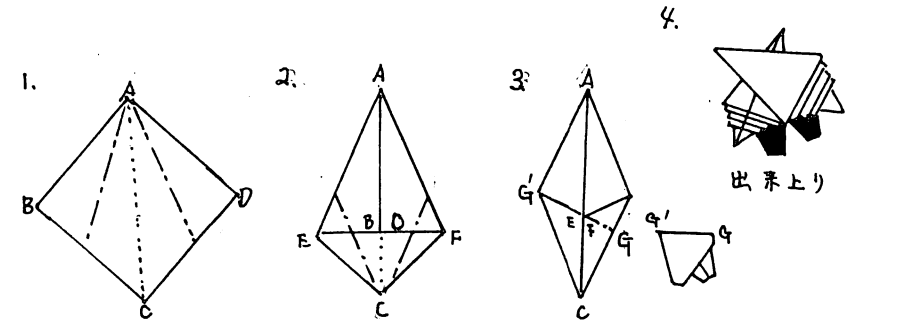
○サンタのブーツ

1．折紙の表（赤）を上にしてABを下に折り、CDを上に折る。
2．CとDをOに合わせ三角におる。
3．EGの辺をECの辺に、FGの辺をDFの辺に合わせて中心まで、しっかり折目をつける。Gの先1cm程折り曲げて靴先の丸みを作る。
4．BEとAFを後ろ側にまわして、折り返しの中に入れ込む。円筒を細くすると可愛い。



○ヒイラギの葉

1．緑の色紙使用。
緑色を外にしてAをCに、BをDに合わせ四つ折りにする。
2．三角の袋を四角に広げる。
3．四枚の羽の辺を中心に合わせ、線をつける。
4．Bを上にあげて中の中心に3の辺を合わせる。Dも同じようにした後、ABCDの先をそろえる。
5．AとCの先を持って左右に開く。
6．底が正四角になりBとDが立つ形にして裏にする。底のEGを折目にしてFをHに合わせる。
7．菱形が交差した形になる。AをGFの線で裏に折り、三段の階段状に折りだす。CもHE線で裏に折り同じように折る。

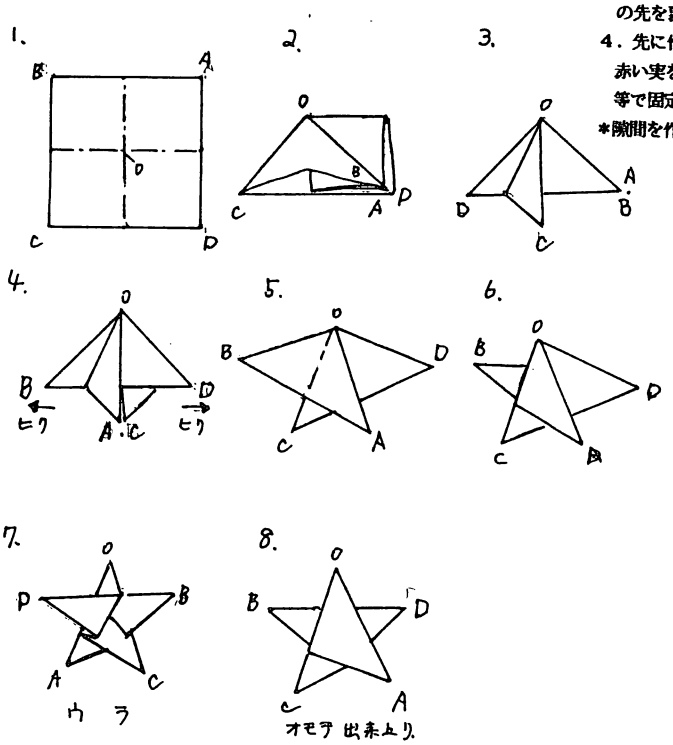


○ヒイラギの実

1．ヒイラギの葉に使用した½大の赤の色紙を使用する。
AB・ADの辺をAC線に合わせる。
2．EC・FCの辺をAC線に合わせる。
3．G、G`線を折り、AとCの先を裏に折り丸みを作る。
4．先に作っておいた葉の下に赤い実を可愛くのぞかせノリ等で固定させて出来上がり。
＊隙間を作らないのがコツ。

○お星さま

1．外おもてにした折紙をAD、BCと合わせ、次にBCをADに合わせて四つに折る。
2．四角の袋を三角に開く。
3．OCの辺を三角の中心線に合わせる。
4．3を裏にかえしてOAの辺を三角の中心線に合わす。そしてBとDを左右に引く。
5．OCの線にそってBのはねを裏に折る。
6．折ったBのはねを折りかえしてA・Cの分量と合うようにのぞかせる。DのはねもOAの線にそって裏に折り、同じように出す。



私と編物

竹村定子

小さい時から、手足のしもやけがひどく今の様に何でも買えるという時代ではなかったので、手袋、くつ下を極細毛糸や極太毛糸で編んでもらっていました。

戦争で、毛糸も少なくなって来た小学校三、四年生位から、見様見まねで編み始めました。編んでいた作品の中で、毛糸と、木綿糸を合わせてくつ下を編み終えた時のうれしさは、今も忘れられません。

娘時代は、機械編み、アフガン編み、かぎ針といろいろ編んでいました。

子供が小さい時は、編んで着せて遊びに行き、帰って来ると、アチコチにホツレが出来ていて、がっかりした事が何度もありました。

今は目も悪くなり、時間もないのであまり編みませんが、編んでいる時の冬は毛糸、夏はレース糸の感触が、私は好きです。

手芸の思い出、あれこれ

冨田慶子

指の変形で一見何も出来ないように見られますが、ヒマと好奇心がある方なので、今迄に見聞きした手芸をあれこれ手がけてきました。ちゃんとした教室に通って習ったというのは洋裁ぐらいで、後は習っている人に教えてもらったり、本を見たりその時々に楽しんできました。

一番古い思い出は、リリアンのひも編みです。筒の周りにある釘にリリアンの糸を巻つけて中へ中へと落していくだけの簡単なものですが、根気よく長いひもを作ったものです。ちょっと年齢を重ねて文化刺繍やスエーデン刺繍等、アップリケ、パッチワーク、デコパージュ、アートフラワー、和紙の張絵、ぬいぐるみの動物やマスコット、人形作り等々、ちょいかじりをして楽しんできました。それらの中で自分に合っているなと思えるのがフエルトで作るマスコットです。これは、軽い、柔らかい、断ち切りでよいということと、色の豊富さで楽しんでいます。毎年、その年のエトを作るのを楽しみにしています。フエルトを二枚合わせた簡単な物です。今年も「うま」を数多く作りました。今は、来年の羊のデザインを考えていますが、落ち着いて針を持つ時間がないので、今年中に出来るかどうか気になる此の頃です。

●就学免除

学齢児童生徒が病弱・発育不全その他やむを得ない事由のため、就学が困難と認められた場合に就学義務を免除する（広辞苑）という就学免除があたりまえであった頃、上平幸雄さんと南光仁子さんは・・・

私の母校

南光仁子

あれは確か、十二年ぐらい前の事だったと思います。電動車椅子という素晴らしい「足」を私にプレゼントしてくれたのは、朝日新聞厚生文化事業団から。

その時の喜びは言い現しようもありませんでした。

さて、「足」のできた私にとって、まずやりたかった事は、「就学免除」で行くことがかなわなかった学校へ通い、義務教育を終了する事だったのです。

それには、まず家族を説得しなければなりません。毎日のように討論を繰り返し、毎日のようにいろいろと関係のありそうな所に電話をしたり出かけていき、又多くの友達にも協力を頼みました。

そのようにして、ようやく家族に理解して貰う事ができたのです。

教育委員会へ出かけて行き、私の希望を伝えました。いくつかの学校も見学させてもらいましたが、もちろんそう簡単には入学できません。

そんな時行ったのが教育相談所でした。母もよく一緒についてきて、何とか学校に行く道を開いて欲しい旨をお願いしてくれました。たまりかねて友達までも、一緒に頼んでくれたりもしました。

しかし、状況は変わらず道は開けません。それでも諦められず、教育相談所に頼るしかなく通い続けていました。

そんなある日の事、ひとりの先生が「もう学校に今行く事をわすれて、小中学校卒業資格を得る為の勉強をして、文部省の検定試験を受けてみないか」と言って下さったのです。その試験に合格したら、その時こそ高校を受験できるそうです。

私は喜びました。「これだ、これしかない」と思いました。そうして昭和五四年四月から二年間の約束で、週三回教育相談所で教えてもらいながらの勉強が始まりました。初めの一年は、国語、数学、英語、この三科目を主に。次の一年は理科、社会の二科目を主にする目標で始めました。私の家から相談所までは、四キロあり約一時間かかりました。よほど雨が降らないかぎりは、出かけていきました。私を教える先生を一人決めていて下さったので、入口で声を掛けるとすぐに迎えに出てくださり、どの先生方も優しく迎えて下さったのです。時には教育委員会の先生方が歴史とかを勉強される日があります。そんな日は私も一緒に、同じ勉強をしました。まあ苦しい日もあったけれど、こんな性格の私ですから毎日楽しく勉強しました。

そうして、六ヶ月ぐらい過ぎたある日、担当の先生から「十一月にね、検定試験があるので力試しに受けてみないか。まだ、駄目かもしれないけど試験慣れをするためよ」と言われたのです。十一月まで二ヶ月ぐらいしかありませんでしたが、それからは理科・社会の勉強も加わり、試験も五科目とも受けてみることになりました。

緊張の試験当日。会場には、中年の男の方の割合が多く、少し驚きました。

いよいよ、試験が始まりました。もう、とにかく無我夢中でやりました。かくして私の度胸試しは終わりました。又、いつものように先生と二人の勉強の日々が続けられました。十二月の半ばを過ぎたある日の事、相談所に電話がかかってきました。それは母からでした。

「小中学校卒業認定書が文部省から送られてきました」

先生は、耳を疑われました。「そんな、ほんまですか。もう一回それ読んで見て下さい。ああ、やっぱり五科目共合格したんやな。これはすごい。お母さん、おめでとうございます。」と話されている声を聞きながら、私は担当の先生と堅い握手を交わしました。その日は相談所の先生方皆さんの拍手に送られながら家路に着きました。

本当に信じられないほどの感激の一日でした。早くても二年はかかると思っていたのに、わずか九ヶ月で合格するなんて夢のような事でもあり、何か気が抜けた感じもしました。

今度は、高校受験の為の指導に切り換えて、引き続き教えて下さいました。どの学校に進むか、身体的な事とか、学力の事なんかを考えて、大変迷いました。桃谷高校とか八尾南高校など考えて下さったのですが、私は創立されたばかりの府立藤井寺養護学校高等部を希望しました。できるだけ自分の力で三年間の学校生活を送りたかったから、家族に心配をかけたくないと言うのが一番の理由だったのです。

その頃父親は、ほとんど寝たきりの状態でした。そんな父に私は「三月十一日に受験するのよ、今日願書出してきたの」と報告しました。とても嬉しそうな顔をした父は、何と三月十日此の世を去ったのです。

その翌日父の葬儀の日、私は一人で受験に行ったのです。あの電動車椅子があったお陰で、なんとか父の出棺にまにあいました。そうして数日後、念願の合格通知を手にしたのでした。

桜の花の満開と同じくして、私の学校生活が始まったのでした。初めは緊張の日々でしたが、その内こんな性格の私ですから割り切っていこうと思いました。エッ、勉強の方はって?、成績

はご想像にお任せする事にして、学校のいろいろな行事は三十何才にして初めて体験する事でしたから、ドキドキしながら過してきました。中でも一番嬉しくもあり、感慨深かったのは修学旅行。北九州一周でした。その時もちょっとした出来事があり、私は一人の人間として、高校生として、とても考え込んでしまったのです。そんな中でも水前寺公園の美しさは一時、いやな事など忘れてしまえる程のものでした。

ただ修学旅行でのその出来事は、学校でその後大変問題になったのです。簡単に言えば、旅行中に生徒がしたトランプゲームのなかに極めて差別的な言葉が使われていた、ということなのです。日頃から差別を受けることの多い立ち場の私たちが、そのことも忘れて差別的要素を含んだ内容のゲームを平気でし注意を受けたり生徒間でも話し合いがなされたのです。「たかがゲームの中だけの事だし、旅先でのくつろいだ時の事だから、そんなに問題にしなくても…」そんな気持も少しはありましたが、反省すべき出来事でした。

様々な思い出を胸一杯に詰め込んで、素晴らしいスピードで過ぎていった色々な時間。そして今、終わろうとしている私の学生生活三年間。いよいよ迎えた、卒業式。新設校で生徒も一期生なら先生も一期生の学校ですから、出席者全員の感激はひとしおだったと思います。

「三年一組阪本仁子」と呼ばれた時、身体中が感動に震えていました。けれどしっかりと卒業証書を手にしたのです。私のような者をこれまで指導して下さった先生方や学友たち、協力してくれた家族、皆様に感謝の気持ちいっぱいに有難う、そして、さようなら。

卒業式は終わりました。私にも母校が出来ました。母校などなくったていいと思われている方もあるでしょうが、私は大切な事だと思っています。藤井寺養護学校、私の母校です。

ラッキーな人生

上平　幸雄

三十三歳の公務員。共働きの妻と二歳の子供が一人います。ごく平凡な家庭ですが、二十年前には想像もつかないことでした。

昭和三十二年、奈良県生まれ。二十六歳の父親と二十二歳の母親の間に長男として生まれました。

未熟児、黄疸、股関節脱臼、そのうえ原因不明の高熱で、生死をさまよったこともあったそうです。すべてに発達が遅く、一歳をすぎても、なかなか立とうとしないことに異変を感じた両親は、ぼくを連れてあちらこちらの大病院や名医を巡りました。しかし、そのたびに診断が変わってしまい、原因も決定的な治療法もわからなかったそうです。奈良から大阪の富田林市に引っ越してきたのも、病院にん。高いドイツ製の薬を買ってきて飲ませてくれたこともありました。しかし、つかまり立ちまでが精一杯で、ついに自分の足で歩くことはできませんでした。結局は、脳性マヒだったのです。

小学校に入る時期になって、施設（中津の整肢学院）に入所しましたが、長続きせずにすぐに退所してしまいました。その後は治療もあきらめ、小学校にも行けないままずっと在宅で暮

小学校は、何年か就学猶予の後、就学免除ということになりました。つまり、勉強させなくてもいいですよ、ということになったのです。学校は家のすぐ近くにあったのですが、通学から校内での身の回りのことまで全部を、親がついて来て責任をもって世話をするということでなければ、入学を許されなかったのです。ちょうどこの頃、弟が生まれたということもあり、ぼくを小学校に入れることは、あきらめてしまったようです。

よくいっしょに遊んでいたはずの、近所の子供たちも、小学校に行くようになると、ぼくなんかとは遊んでくれなくなりました。なんとなくさみしかった思いを、いまでも覚えています。この後の数年間というもの、テレビだけが唯一の友達、という生活が続きました。

昭和四十三年の正月、隣の家から火事になり、同じ富田林市内ですが引っ越しをしています。少しおおげさですが、ぼくはこの引っ越しが、この後のぼくの運命を変えたと思っています。

この引っ越しで、小学校、中学校共に、校区が変わってしまい、それが原因で何かの手違いが生じたのかもしれません。二年後の昭和四十五年、就学免除だったはずのぼくのところにに、突然、中学への入学通知が届いたのです。両親もびっくりしたと思いますが、一番ショックを受けたのは、ぼく自身でした。ずっと在宅で、テレビばかり見て暮らしていた自分が、もう中学に入る年齢になったことを、あらためて知らされたのです。四月になると、ぼくが入るはずだったクラスの、担任教師やクラスメートが、なぜぼくが登校してこないのかを不思議に思って、訪ねてきてくれました。しかし、体に障害があって歩けない。ましてや、小学校にもいっていないということで、納得したようでした。しばらくして、学校にはいけないものの、義務教育に代わるものとして、先生の方から週に二回、家にきて勉強を教えてくれるという、訪問教育を受けることになりました。ここで初めて、小学校からの勉強をすることになったのです。

ところが、一年後の七月、中学の当時特殊学級といって、勉強についていけない生徒たちのクラスの担任教師が、突然訪ねてきたのです。この先生とどういう話をしたのか、よく覚えていませんが、学校へいってみたい、というようなことを言ったと思います。そんな気持ちが通じたのか、週に一回でも二回でもいいから、中学へきてみないかという話がもちあがったのです。結局、この先生が通学に必要な自動車での送迎から、校内での生活までのすべてに責任をもつということで、ぼくの両親と、学校側の両方を同時に説得してくださったのです。こうして、思ってもみなかった中学での生活が始まったのです。この先生との出会いがなければ、ぼくの人生も、今とはずいぶん違うものになっていたと思います。

二学期から登校することになり、とりあえず、一学年下の一年生のクラスに入れてもらいました。ここで五教科の勉強をし、体育や音楽の時間は特殊学級で、既にみんなが習っている一学期の勉強をしました。また、家では、訪問教育を継続してもらい、小学校のほうの勉強も続けました。ちょうど、大きな二枚のジグソーパズルを、同時にぶちまけたような状態だったと思います。

年が明け、三学期も終わり近くになって、このまま一学年下のクラスに留まるか、本来の学年に戻るか、という選択を迫られました。ぼくは迷わず、たとえ勉強にはついていけなくても、本来の学年で同じ年齢の仲間と勉強するほうを選んだのです。新学期からは、二年生を飛び越

して三年生になることになりました。

新学期が始まってすぐに、実力テストがあり、当然のことながら、成績は二十点から三十点というところでした。このときには、とくにくやしいとも思いませんでした。しかし、とにかく早く、みんなのレベルにまで追いつきたい、とただそれだけを思っていました。それよりも、同じ年齢の仲間といっしょに、毎日勉強できることのほうが、ずっと楽しかったのです。夏休みも補習授業の連続でしたが、いま思うと、体も頭も、本当によくついていけたものです。

三年生の二学期も終わりに近づいた頃には、ジグソーパズルの絵もかなり完成してきました。みんなに追いつきたいという思いもほぼ達せられ、高校進学をにらんだ実力テストでも、学年の平均点以上の点が取れるようになっていました。そうなると、せめて義務教育だけでもと思っていた、両親も、先生も、そして、ぼく自身も、進学を考えるようになっていました。

結局、公立高校に進学するのですが、この後のことは、またの機会に…。

”奈良から“

斉藤孝文

皆様、こんにちは。

今年も「サロン・あべの」紙は、優良賞をいただかれたそうで、お目出度い限りです。皆様が力を合わせて毎号立派な読みごたえのあるサロン紙を編集して下さる賜物と感謝の外はありません。

これからも、是非頑張って下さいませ。

当地に参りましてからの報告と申しましても、何分にも橿原市は福祉の面でも遅れておりまして、大阪とは大変な相違があります。ボランティアをお願いする場合でも十日位前にいちいち書類を提出せねばなりませず、つい大阪時代の方にご無理をお願いしてしまう次第です。

それに、出掛ける先も殆ど神社仏閣ばかりですので、余り興味もなく、娯楽の場が少なく映画など一度も観賞していません。本当にテレビだけが唯一の慰めになっており、たまに電動車椅子で一、二時間の散歩を楽しんで大阪時代が懐かしいとこぼしております。「サロン・あべの」の集会にも一人で行けましたし…。本当に楽しみにしておりましただけに、一番後悔の残る思いが致します。トーキングエイドも未だ制度化されていないからとのことで、何年先になります事やら心細い限りです。

でも、もう後には引けませんので、新境地を開拓して行くのみと頑張る覚悟を致しております。

向寒のおり、何卒お身体をお大切に益々ご発展の程をお祈り致します。

真理について

岡　知史

以前、ある小さな講演会で、講師が「みなさんにとって、人生の目標になるような一番大切なものを何にかひとつ紙に書いてください」と言って、十人くらいのグループごとに大きな紙を配った。参加者はいろいろと話しあいながら、各自の答を紙に書いた。

みなが書き終ると、講師は、前に張り出された紙をみながら、ひとつひとつの答を読み上げ、自分が連想することなどを付け加えてコメントしていった。

ユーモアたっぷりの講師の話しぶりに大笑いしたあと、さて、ぼくの答にはどんなコメントがあるのかと期待したが、どういうわけかぼくの答にだけはコメントがなかった。

ぼくは「真理」と書いたのだ。

なぜ、コメントがなかったのか不思議に思ったが、改めて考えてみても、やはり自分がいままで求めてきたし、またこれからも求めていきたいのは「真理」だと思うのである。

「真理」に興味があったからこそ、小学生のころは天文学者になりたかった。宇宙の果てがどうなっているのか不思議でしかたがなかった。

高校生になると、大学で数学を学びたいと思った。宇宙を知るには技術的な限界がある。しかし、数学なら人間の思考だけで「絶対の真理」に出会えるのではないかと考えたのである。

大学生になると、「一足す一は二」というような基礎的なことに興味をもった。そして「一足す一」というが、その「一」とは何かということを定義するために百ページ以上を費やしていた数学書を読み、結局は数学もある種の虚構・仮定の上に成立したものにすぎないのだと実感した。

人間にとって大事な「真理」とは、科学的で論理的なそれではないのではないかと考えはじめたのも、そのころのことだ。

真理とは、絶対に反論できない客観的な論理とか事実といったものではなく、自分にとってかけがいのないもの、それに従って生きるしかないもの、それに自分の人生を賭けることなくしては自分に対して誠実ではありえないもの、といったものではないだろうか。

では、ぼくにとって「真理」とは何かということだが、それは「自分は例外的な存在ではないということ」だと考えている。人間の価値においても、幸運においても、権利においても、例外ではないということである。

途上国で何十万何百万という人々が飢餓で死に、恐怖政治のために何千人何万人という人が拷問にかけられ殺されている。そんな現実を知りながら、自分は例外ではないと本気で考えることは実に難しい。「世界にはこんな酷いことがあるのか」と他人ごとのように朝食のテーブルで新聞を読むことから、「なぜ自分はまだ無事でいるのか」という深い不安とある種の罪悪感へと意識が転換されてしまう。

くだらない退屈しのぎのゲームで何万円も使う人も、その何分の一かの金で学校に行ける子どもがいることを知っている。しかし、それでも何もしないのは自分を例外的な人間のように思っているからだろう。

自分の命と他者の命は等しく同じだけの価値があるという真理を本気で生きることができる人など、何人いるだろうか。誰かに脅迫されて、目の前の人間を殺せば一日だけ殺すのを延期してやろうといわれたとき、ぼくたちは何人の人を殺したあと、自分の命を諦めるだろうか。おそらくは、百人殺しても、まだ自分は百一日生きたいと思うのかもしれない。

誰もがある程度、自分は「例外的存在」なのだと信じることは、自分の心の安定には必要なのだろう。しかし、そのためにこそ愚かな人生を過ごしてしまうのではないか。それは嘘を信じることに他ならないからである。

●われらがあべのボランティア・ビューロー⑤

僕はこう思うんですが、どうでしょうか

この「われらがあべのボランティア・ビューロー」も五回目になってしまいました。いつもながら何がいいたいのかよくわからない文章になってしまったことは本当に申し訳ないと、まず最初におわびさせて下さい。すっかり反省したんで（こんな日本語があるかどうかは不明ですが）今回はホンネで書いてみようと思います。

そもそも何でまたこんな文章を書くことになったのかというと、五月の出会いの時にボランティア・ビューロの話を聞いた、これがきっかけなんです。その時のサブテーマが「こんなビューローであったらいいなー」だったんです。それで本当は思いっきり夢みたいな話がしたかったんだけど、時間もなくてなかなかそんな話もできなかった。それがなんとなく引っかかってたんです。ボランティアをするっていうことはもちろん人それぞれ意味があるんでしょうが、僕としてはやはり「夢」というか「理想」みたいなものがとても大きい。だからそれを考えてみたかったし、みなさんの意見も聞きたかったんです。

それと、ビューローがいろいろ変わっていってる中で、僕らとしてもだまってみてるだけでいいんだろうか、そんな気持ちもあったんですね。それが「われらがあべのボランティア・ビューロー」っていうタイトルなんです。

サロンが単に月一回の出会いだけじゃないように、ビューローもボランティアのお世話をしてくれるだけのところじゃないでしょう。あべのの人にとっては、やっぱり「われらがあべの」なんだし、そのための大切な場所のひとつが「われらがあべのボランティア・ビューロー」なんだと思うんですが、どうでしょうか。（おわり）

●原田　仁

ナンペイの ひとこと&ふたこと ④

＊ 鍵をかけないこと ＊

妻の友人で、私にとっても二十数年来の知人でもある女性が三重県にいる。

現在は、独り暮らし（じゃなかった！愛猫との共同生活）で、たくさんのボランティアに囲まれ家を借りて生活されている。

一年に一度くらいの割で訪ねてる私たちだが、その度にまた新しいボランティアや友人たちが増えていて、入れ替わり立ち替わりという感じで彼女の生活を支えているようだ。

ところで、彼女がくらしている家は大阪風にいうと二DK風呂付きの「文化住宅」。結構広くて一人で生活するには勿論充分だし、ボランティアが何人か集って彼女の介護をするのにも支障はないし、時には、というよりおそらく頻繁に友人を含めてのボランティアの「集会所」となっているだろうな、と思える広さである。

さて、この「集会所」、じつは二四時間営業なのである。

一日中、玄関の鍵はかけない。だからたとえ夜中であっても「こんばんは」と言って誰でも入ってこれる。永く留守にするときはともかくとして、ちょっとした外出のときでも鍵はかけていないらしい。だから、ご主人がいなくてもボランティアがやってきて洗濯だの片付けものだのをしてくれている、という。

「いいなぁ」とも思うし、「楽しいだろうなぁ」とも思うし、「よくやるなぁ」とも思う。しかし、同時に「かえって疲れるだろうなぁ」とも思う。勿論「不用心だなぁ」とも。

けれども、「鍵をかけない」というこのことは重度の障害者である彼女が独り暮らしをするための生活の知恵だと思う。招かれざる不届き者の侵入を恐れるよりも「鍵をかける」ことで万が一のときに介助の手が届くのが遅れることの方を恐れるのだろう。そして、「鍵」一つによって周囲の人間関係がせばめられるよりも、少しでも広がることの方を選んだ。

大阪という大都会の真ん中で、彼女のような「鍵をかけない生活」が出来るかどうか、はなはだ疑問だし、それ以上に人それぞれに性格も違い生活のパターンも違うのだから一概には言えないが、障害者の生活のある一つの形として、彼女の「鍵をかけない生活」がこれからも無事続くように願いたい。

南光龍平

美智子のこんな話

ある休日

岸田 美智子

木枯し第一号が吹いたあくる日の十一月の日曜日、秋晴れのよいお天気になりました。この日、久し振りに私は、電動車椅子の友達に誘われて、介護者と四人で（女性ばかり）神戸まで遊びに出かけました。

私の家から二時間ぐらいかかりますが、エレベーターとエスカレーターを乗り継いで工夫すれば、ほとんど階段なしで行くことが出来ました。特に阪急の色々な障害者用設備には、助かりました。エレベーターは、もちろんですが、梅田のエスカレーターも車椅子用に作られていて、三段ぐらい平坦に出てくるようになっていました。

そして、各車両は、日曜日でやはり大変混んでいましたが、車椅子用のスペースが広くとられていたので、そこに車椅子の私達が落ち着くことが出来てよかったです。

目的の神戸博物館には、お昼頃着くことができました。この博物館で、昨年亡くなられた漫画家で有名な手塚治虫展をやっているので、それを見に行きました。

あの懐かしい鉄腕アトムやジャングル大帝、火の鳥などの作品の原画が非常にたくさんあり、とても懐かしく私の思い出と共に浮んで来て楽しいひとときでした。

ここの博物館も、スロープや障害者用トイレなども整っていて助かりました。

この展覧会を見たあと、神戸といえば、ケーキがおいしそうだったので、皆んなで食べに行こうということになりました。

車椅子で入りやすい喫茶店など捜していると、たまたま洋菓子で有名なバームクーヘンのユーハイムのお店の本店がありました。このお店は、六階建てのビルになっていて一階がお店で、二階が喫茶店で、三階以上が工場と事務所なっていました。

私達は、二階の喫茶店でケーキをたべました。やはり私は、バームクーヘンを食べようと注文しました。それで、バームクーヘンが出て来たのですが、何とお皿に三切

れぐらい生クリームと一緒にきれいに盛りつけられて、ナイフとフォークがついて出て来たのです。まるで、洋風料理のよう。

私は、面白いなと思って、久し振りに味わいながら食べました。とてもあっさりしていて、おいしかったです。スペースも広くってゆったりしていました。そのあと、三宮の商店街をウロウロして、買い物をしました。私は、イングランドのコインのネックレスを買ってしまいました。

日曜日は、何かと行事が多くってなかなか遊びに行く機会が無かった私ですが、とてもリッチな気分の一日でした。

＃感謝します＃

カンパ・アルバム・冊子・石鹸券等、ご協力ありがとうございました。お礼を申し上げます。

十一月のカンパ　金二一三〇〇円

E・K、小倉寛一、小川哲、加賀谷正、木口南舟　斉藤良造、崎本ヒサエ、正田敏子、竹村定子、土屋由美子、森下公子、匿名二名様、　（敬称略）

∞サロン・あべの紙の朗読テープが出来ました∞

「阿倍野区ボランティア連絡協議会」の朗読グループのご協力により、サロン・あべの紙の録音テープを作っていただいています。バックナンバーは三九号から、五三号の分があります。五〇号は五周年記念紙になっており九〇分と六〇分の二本のテープに収録されています。サロン紙朗読テープご希望の方は、冨田までお申し出下さい。

（TEL06-691-1028）

おしらせ

一月の出会い

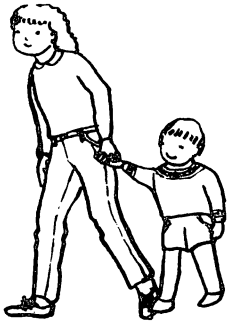
日時　平成三年　一月十九日（土）
　　午後一時～四時

場所　おたのしみに（お申し込みの方には、後日ご案内を差し上げます）

内容　「今年もよろしく　新年会」

会費　二〇〇〇円

申し込みと問い合わせ
　平成三年一月十五日迄に左記へ
TEL・06-691-1028（冨田慶子）



編集後記

５２号５３号とお休みし、つづいて５４号もと思っていましたら、（は）さんがいきなり５３号で（石）の復活を宣告され、驚く間もなく５４号の入稿の日が来ました。

変わり映えのしないのが復帰しますが、まあ　ひとつよろしく。　（石）

一九九〇年十二月二日発行（毎日発行）KSKP通巻一五六三号一九八四年八月二〇日第三種郵便認可
発行人＝関西軍事郵便期刊行物協会　大阪市東成区中本一－三－六　ベルビュウ森の宮二〇七号

<サロン・あべの>第５４号　　編集：サロン・あべの　運営委員会　定価 100円
（〒545 大阪市阿倍野区阪南町６－３－２６．電話０６－６９１－１０２８．冨田慶子）
印刷；セルフ社〒545 大阪市阿倍野区西田辺町２－２－１０－１０１．TEL.06-691-2365.